

蟻通

四番目物としたら、ややドラマ性に欠けるためか、素謡会の番組では名前をみることに少ないが、一場ものにしては変化に富んだ構成、豊かな曲趣、シテ、ワキともに謡いの技巧を聞かせることが多いことなどを考えると、初番目ものの扱いで、もっと上演頻度が高くても良さそうに思われる。(百番集では表の扱いでもあること故)

シテ宮守の姿を借りながらも、実は蟻通の明神であるから、軟弱にならず、格調を保つこと。その意味で、最初のサシ謡(二丁表)は、節付けはさして難しいものではないが、表現力の問われるところなので要注意。

ノット(八丁表)はあくまでも厳かに、恭しく。特に冒頭の「謹上再拝」は十分に気持ち落ち着けて謡うべし。

その他部分的に技巧を要する箇所は、「馬上あらば」(三丁裏)の持ち上げ方、「蟻通の」(四丁表)の浮き入り廻し、「雨雲の立ち重なる・・・」(五丁表)のテンポと最後の崩し、「ありとほしとも思ふ・・・」(五丁裏)の和吟への移行と「あら面白い・・・」の、入りの次の「ら」の謡い方、などなど。

ワキ紀貫之であり、装束も白大口であるから言わずもがな、重い。普通なら道行、着せリフの後、シテが登場するが、この曲では「灯火暗うして・・・」(二丁表)の技巧的に難しいカカル謡が付加されている事からもワキの重さが窺い知れる。

芭蕉

構成上は、典型的な三番目物でありながら、華やいだところが全く無いという点で異色の作品である。だが、「ものの哀れ」を美しく謳い上げていくクリ以降の曲趣は絶品である。

地謡も総じて、慎重に、落ち着いて、しかしキリにかけて徐々に盛り上げていく心がけが望ましい。

シテかつてこの曲を習うとき、師から、「この曲は、平物でありながら老女の位で謡う珍しい曲です」と言われたことがある。

だからと言って、か細く、弱々しく謡っては能の謡にならない。声量は控えめにしながらも、芯に力を秘めること、謡い出し、謡い止めを丁寧にすること、息継ぎの頻度を多くすること、一字落しや二字落しのイントネーションを地味にすることなどがポイントである。

個別には、三丁裏のカカル謡や後シテの一声(八丁表)は思い切って抑えること、ロンギ(六丁裏)の謡いは十分に抑制して謡うこと、後シテのカカル謡(八丁表)は謡本の注釈「引き立ててスラリメニ」通りに謡わぬことなどがポイントであろうか。ついでながら、謡本注釈に「スラリメニ」とあつたら、それまでの調子を一段緩めて、落ち着いて謡うよう心がけて頂きたい。

ワキ三番目物のワキは概して重いが、まして、本曲のような曲趣を踏まえると軽々しくは謡えない。ワキも老女物のワキのつもりで、シテとのバランスを考えながら謡うべし。就中、待謡はしみじみと。

砧

テーマが分かり易く、構成が緻密で、詞章の含蓄が奥深く、節付けがダイナミックなこの曲は、素謡としては最高の名曲であると言える。役処も地謡も謡いとしての難易度が極めて高い(ハネ張り、メラシなどの扱いも随所にあり、師伝に俟つところが多い)

から、全曲を通じて、終始緊張感を維持しながら謡わねばならぬ。

シテⅡ曲趣をまともに受け止めて、哀れみ深く謡わないこと。曲の位から考えて、ある程度は、毅然とした謡ぶりであることが望ましい。

最初のサシ謡（二丁表）と五丁表のカカル謡は、共に力を抜かずにしみじみと。物着（五丁裏）の後は、破の位になるから、シテはやや引き立て気味に謡い、盛り上げていく。但し六丁裏の「隣砵緩く急にして・・・」は、その前の地謡（一声）が極度に高い調子をとるので、引きずられないよう、テンポと音程を外して、静かに、思い切つて低めに謡う。

後シテは、全般的に力を内に秘めて、重々しく。（謡本注釈の「シットリ」や「閑カニ」に惑わされてひ弱にならぬよう心掛けたい）

十一丁裏の「烏てふ・・・」は、思い切つて力を爆発させて謡わないと地謡が出られなくなってしまう。

ワキⅡ謡う分量は少ないが、シテ以上に実力を問われる役割り。旅僧や在所の男と異なり、単身赴任が長引いたことがもとで妻を死なせてしまった当事者であるから、謡にそれなりの思入れがなければならぬ。

技巧的には、待謡いの後半からの「梓の弓の・・・」が本曲で一番難しいところ。ツレⅡ大雑把に言えば、「夕霧」も熊野の「朝顔」もさしたる変わりはないようだが、只一箇所、六丁表の「擣つとかや」で決定的に違つてしまう。「つ」はハネ張りのようにせり上げ、「かや」はメラシ気味に着地するのが流儀。「遊行柳」のシテ「新古今に」に同じ。

融

「この光陰に誘われて・・・」の詞章の意味から、本曲は追善の曲として知られているが、実質は、栄枯盛衰の哀れさを漂わせながらも、貴族の贅を尽くした遊興を再現するのが本旨であるから、湿つた雰囲気は全く無い。（五番目物として位置づけられている所以でもあるのか）

そして本曲の特徴は、私見ではあるが、シテとワキ、シテと地謡とのやり取りが多く、いわば三者のコーポレーションで全体の大半が成り立っていることである。

シテⅡ前シテは、同じ尉ものでも、皇子の位であり、一時は帝位を窺う程の身分である融の化身であるから、阿漕のような漁師とは全く風合いの異なる謡い方を心がけなければならぬ。

例えば、四丁表の「や」「や」は、一般に発声の強さ、高さや長さ、そして語尾のイントネーション、などが微妙に役処のキャラクターやその場の情景によって異なるものであるが、融においては、単に月が出たことに気が付いたに過ぎないことに留意すべし。

語りは、淡々と嫌味が出ないように。「名所教え」（七丁表）は「語」の部分の調子（本曲のなかではやや暗い）を替えて、ノリ良く、明るめに謡うこと。この中で、「深草山よ」は本落ちであることに要注意。そうでないと地謡への渡しがもたつく。ロンギはたっぷりめに。地謡はどちらかと言うと軽快に謡うことを常とするから、シテは地謡のテンポに惑わされないよう注意が必要。

ワキⅡ前述の通り、シテとの絡みが多く、同吟もあるくらいなので大切なシテの引き立て役。出番が多くても、ワキが浮き上がらないように留意すべし。